

対馬に生息する動物たち

内田 陽子

1. はじめに

2019年度の対馬アクションリサーチ合宿の2日目に、環境省、長崎県、対馬市が共同で設置・管理をしている対馬野生生物保護センターを訪問した。自然保護官による講義を聞き、施設見学をすることによって、対馬の生態系の保全と持続的利用に向けた課題について理解を深めた。

これに加え、私たちは2日目の夜にツシマヤマネコ観察、4日目の朝に野鳥観察を行った。本レポートではこれらのことについて述べる。

2. 講義の内容

環境省対馬自然保護官事務所の山本似智人上席自然保護官から対馬野生生物保護センターの役割や対馬の生態系についてのお話を聞いた。環境省では主に廃棄物対策、公害規制、自然環境保全、野生動物保護などを実施するとともに、地球温暖化対策、オゾン層保護などを他の府省と共同で行い、環境基本計画などを通じ政府全体の環境対策を積極的にリードしている。対馬野生生物保護センターは環境省の自然保護官事務所として、全国に約100箇所あるうちの1つである。

本センターは、環境省が長崎県と対馬市と共同で設置・管理しているため、自然環境行政の拠点となっている。「行政」と付くことから、保護団体・研究機関・動物園とは異なる。そしてこのセンターは、対馬の自然の普及啓発とツシマヤマネコの救護や調査等の拠点として日々活動に取り組んでいる。

①ツシマヤマネコ保護に関する取り組み

対馬は、ユーラシア大陸と日本列島の両方の特徴が混ざった生物相を持ち、特有の自然環境や生態系を持つ。その1つにツシマヤマネコがある。

ツシマヤマネコは日本では長崎県対馬市にのみ生息する野生動物であり、対馬では主に北側でよく見かけられる。現在は個体数が減少しており、100頭前後いるとされているため、種の保存法の国内希少野生動植物種や文化財保護法の天然記念物の指定を受ける希少種である。

ツシマヤマネコは対馬の生態系の頂点にいる捕食者であるため、対馬の自然全体が守られないと生息できない、対馬の環境のシンボルである。そのため、ツシマヤマネコを守ることは対馬の環境全体の保全につながるのである。また、ツシマヤマネコは対馬の広報媒体としても活躍しているため、絶滅することがないようにしなければならない。対馬野生生物保護センターでは、ヤマネコだけではなく自然環境全体の保全を目的としている。対

馬の生物・自然の保全のための活動を各機関と協力し、ヤマネコの生息状況の調査や、負傷したヤマネコの保護・リハビリ・野生復帰、ヤマネコの交通事故対策、鳥獣保護区の管理、普及啓発活動、ボランティアの調整などを主に行っている。

ここではツシマヤマネコ保護増殖事業実施方針を基にヤマネコの保護の目標を、短期・中期・長期・最終の4つに分けて立てている。保護対策の進め方として6つのステップがある。

(1)生息環境の改善

(2)保険個体群の確立及び適正な管理

(3)飼育下繁殖個体の野生復帰に関する技術開発と、下島における野生復帰の必要性の検討

(4)ツシマヤマネコの保全と経済の活性化や地域振興の両立のための取り組み

(5)関係者が連携して保護対策を実施し、必要に応じて本方針に基づく行動計画の作成

(6)科学的知見に基づく順応的管理と、各種対策の検討・実施の基礎となる研究調査の推進

以上の6ステップである。ツシマヤマネコは対馬の下島にはあまり生息しておらず、上島でよく発見される。そのため、下島では、上島でも行われている生息環境改善に加えて野生復帰が計画されている。また、上島、下島、動物園（生息域外個体群）の3つが連携して得られた知見のフィードバックを行いながら、相互の保全に努めている。

全国10箇所の動物園でツシマヤマネコ35頭を飼育しており、そのうち4箇所で繁殖に成功しているが、半数以上が死亡している。ツシマヤマネコの繁殖にはまだ技術が追いついていない。更に、繁殖に成功したところから野生に帰すために、危険回避などを慣れさせなければならないが、現時点では難しく個体数を簡単に増やすことができない。

②対馬の産業と生物多様性

対馬の産業は、対馬特有の地理・地史がもたらした特異な人間活動と生物によって構成されている。一般的な離島では第一次産業の従事者が多い傾向があり、対馬もその例に当てはまる。対馬での農業・漁業・林業は全て生物がもたらす恩恵を利用しているため、対馬の産業は生物とその保全と深い関連を持っている。

・シイタケ

対馬で作られるシイタケは県内生産量の99%を占めるほどである。その肉厚で良質なシイタケを作るためには良好な光と風を与えることが必要である。そのため対馬では一般的な広葉樹ではなく針葉樹林内で栽培している。

・米

ツシマヤマネコがやってくる田んぼで作られるお米は、「ツシマヤマネコ米」というブランドで販売されている。これも、ツシマヤマネコが田んぼによく現れるため環境配慮型で作られている。

・蜂洞

山肌に作られた蜂洞でニホンミツバチがハチミツを作る。対馬の蜂洞は全国的にも有名であるため、絶やしてはならない対馬の産業の一つだ。しかし近年、ツマアカスズメバチという外来種がニホンミツバチやそのほかの昆虫を襲うため在来種の個体数が減少しており、機能しなくなった蜂洞がよく見受けられる。

③ 対馬を持続可能にするためにすべきこと

対馬の現状として、(1)シカやイノシシの増加、(2)荒れた森林の増加、(3)下層植生の衰退、(4)海岸の海ゴミ問題、(5)外来種の増加 が挙げられる。

ツシマジカは元々、長崎県の天然記念物であったが、2000年に解除され、有害鳥獣として認定されて現在4万頭ものシカが対馬に生息し、対馬の生態系を破壊している。年間約6,000頭を駆除しているもののシカが減ることはない。シカの角とぎによって林業への影響が出るほか、森林内の下草を食べるため、ツシマヤマネコが餌としている動物も減るといった影響が出ている。

自然や野生動物を「保護」するのみではなく地域の資源として活用することで、持続可能な形で対価を得る仕組みに移行することが急務である。地域で誰がどのような仕組みを考えて実行に移すかが、対馬の課題である。

3. ヤマネコ観察

2日目の夜にツシマヤマネコ観察を行い、私たちは2つのグループに分かれて観察を開始した。ツシマヤマネコに詳しい写真家の川口誠氏と、対馬市役所の前田剛氏とのグループに分かれ、それぞれ違う場所でヤマネコを探し、見つけたら合流するという流れだった。

私は川口氏の車に乗ってヤマネコを探した。ゆっくり進みヤマネコを見逃さないように気を付けながら進んだ。サーチライトで田んぼや道の端などを照らし、ヤマネコの目に反射した光を目印にしてツシマヤマネコを探した。人懐っこいヤマネコもいるらしく、人の近くまで来てくれることもあるらしい。しかし、その個体にGPSをつけてその個体の居場所を把握することは、GPSの電池の問題などがあり難しいようだ。

ヤマネコを探す過程でNHKの車両を見かけた。お笑い芸人のU字工事がその番組でロケをしており、ツシマヤマネコが特集されるほどに有名ということを改めて実感した。

この日は3頭のツシマヤマネコを観察することが出来た。耳の裏の白斑や額の縞、長く太い尻尾を確認できた。地元住民でさえツシマヤマネコを観測したことがない人がいるらしく、川口氏も驚くほどその日は複数のツシマヤマネコを観ることができ、運が良かった。

4. 野鳥観察

私たちは4日目の肌寒い朝に内山展望台に上り、アカハラダカの渡り（鷹柱）を見るために双眼鏡で3時間観察した。アカハラダカの渡りを観察したい人が多くいて、フィールドスコープや超望遠レンズを持参している人もいた。地域の野鳥の会の会長にも偶然会い、野鳥についてのレクチャーを受けることが出来た。結局、アカハラダカの大群を観ることはできなかったが、数羽のアカハラダカの渡りやハヤブサ等を観察することが出来た。とても寒い朝だったが、天気が良く気持ちのいい時間を過ごした。

5. まとめ

対馬がツシマヤマネコを地域全体で保護していることを講義やセンターを見学して知ることが出来た。私たちがセンターを訪れたときは、飼育されていたツシマヤマネコの福馬が老衰で亡くなっていたが、福馬に対する感謝の言葉や死を悲しむメッセージなどがたくさん送られていてとても大事にされていたということが良く分かった。対馬野生生物保護センターの普及啓発活動によってヤマネコの生態を知ることが一番良い方法なのではないかと思う。話を聞くだけより実際にヤマネコを見て愛着を持つことで、ツシマヤマネコが絶滅しないために今自分たちが出来ることを考え、実践に移すのではないだろうか。他人事を自分の事として考えることが興味関心を持つ一番の近道なのではないかと思う。対馬の環境保全に興味を持つ入り口として、この対馬野生生物保護センターの取り組みは良いきっかけの一つである。実際に私も山本氏のお話を伺い、施設を見学して、ツシマヤマネコの生態や見分け方、特徴を知ることが出来た。

また、ツシマヤマネコの交通事故件数を見て驚いた。合宿所に向かう途中の道でツシマヤマネコの交通事故に関する注意喚起の看板を見たが、交通事故が2019年に3件も起きているとは思っていなかったため（9月調査時点）、やはりこういった広報活動の必要性を改めて感じた。

対馬には島固有の生態系があり、対馬の個性を守り維持することは生物多様性を守ることにつながる。現在、ツシマジカやイノシシなどが対馬の生態系を破壊している。その影響でツシマヤマネコやその他の島の固有種の生存が危機にさらされることは、対馬の生物多様性だけではなく日本や世界の生物多様性のバランスが崩れる原因になってしまう。そのためツシマヤマネコの保護活動は軽視してはいけないと感じた。そしてその危機感を対馬全体で共有しなければならない。

（うちだ・ようこ 立教大学社会学部現代文化学科 3年 阿部治ゼミ）